

波打ち際

砂浜があった

砂浜があれば平地がある

狭いの広いの

言っているのはあんたぐらいなもんだ

なんとたって平地なんだ

男が小屋をおっ建てた

小屋でいい

小屋で

そいつが男のねどこだ

女が来た

どこから来たかって か

世の中の女をひとまとめにした女だ

赤ん坊も少女も浴衣の襟から匂い立つ湯上がりの肌の香りも乾燥し

た老人特有のかさかさした肌さわりもひとまとめにした

女だ

暗くなると眠った

寒い夜も汗ばむ夜も

眠りを引きずりあげ

眠りをかぶって眠った

からみあっている

疲れどころか

からだがすっ飛んでいった

どっちが男でどっちが女か  
何も残っていない

大潮だった  
からみあったからだがほどけると  
夜が出ていった

子どもがいた  
うようよいた

平地からはみだしているのもいた  
やっとこさしがついていていのもいた  
あっちにもこっちにも

まるで蟹だ

派手なのも目立たないのも  
のろくさいのは泡喰って足をからめてすねを擦り剥く

放っておけ

すばしっこくなる

それでこそ子どもだ

あんたは見なかったのかね

砂浜は広くなり狭くなったりする

子どもが多過ぎることはない

子どもは食み出たがる

真ん中より端っこ

端っこをつたって 慣れたもんさ

足を滑らせて 慣れたもんさ

海藻が

光みたいにからみつく

泡が必死になって逃げていく 死んだよ

子どもが寄り集まってきて引きずりあげる  
死んだ子どもが生き返る

そんな馬鹿な

いや

それが子どもなんだってば

貝も海藻も子どもも

多過ぎることはなかった

朝に食べる

夕に食べる

うまい貝もあればまずい貝もある

食えない貝もある

これがすべてだ

うまい

まずい

食えない

これがすべてだ

どこにいようと

いくつになっても

うまい

まずい

食えない

これがすべてだ

違うかね

すべてはこれだ

砂浜が帰ってくる

老人ホーム  
目をつむっている  
おじいちゃん おばあちゃんの  
波打ち際

フネ

子どもはフネをつくる  
つくったら浮かべたい  
浮いたら乗りたい  
もう乗っている

子どもの数だけフネ  
おっかないほどの単純さに  
からだがあななく からだがだよ  
瞳の波頭はきらめく

遊びは風をばんばんに  
風は遊びをずんずんと

フネに  
子どもはいなかった だって  
あんたの目は  
いつだって見ているだけだ  
波音のオクターブ上空  
子どもの吹く笛の音は配達されましたか  
サインをお願いします

男が女に乗る  
唇を押しあて舌を立て潮の流れをまさぐる  
男はからだをそらす

汗ばむ背を風が吹き上げる  
女は

大きな波に飲みこまれるたびに  
息が漏れないように目をかたく閉じるが  
半開きの口からは

潮の泣き声

男は胸をしならせては

くつがえった女を操っていく

大きな波

流木を転がし

女が男にまたがって

海藻にからだをくねらせる

大きな波に突き落とされるから

爪を立て滑りやすい股間はけいれんする

このままとはどんなままか  
尻の大きな勃起する乳首の子ども

星が掃き消され

引っこみのつかない月が山の端に引つかかる  
森は黒衣に着替える

昔の話ではありません

砂浜がありました

そこかしこ

打ち上げられ海藻は根をはり

花をまたたかせる

虫がいつぱい吐き出される

太ったネズミに蛇

蛇には鳥

漂い着いた死体がひからび  
貝が付着しました

かなしいフネ

係留されたフネ

フネだろうか

島だろうか

海岸はコンクリートの箍たががこびり付きました